

2024-25年度レギュラーコースカリキュラム報告 —アメリカ・カナダ大学連合日本研究センターの集中日本語教育—

秋 澤 委太郎

1 はじめに

アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター（以下IUCと略記）では、①10カ月間にわたるレギュラーコース、②夏期集中コース、③夏期漢文コースの3種類の集中日本語教育が行われている。本稿は①のレギュラーコースについて報告するものであり、②と③については[大橋ほか\(2025\)](#)と[大竹\(2025\)](#)を参照されたい。

本年度レギュラーコースは、2024年9月2日から2025年6月6日までの40週間、学生54名（うち博士課程在籍中または博士号所持者14名、修士課程在籍中または修士号所持者18名、その他22名）を指導した。常勤教員11名と非常勤教員13名が指導にあたった。

2 レギュラーコースの概要

40週間のレギュラーコースは4学期に分かれており、最終週に開催される卒業発表会によって締めくくられる。今年度の第1学期は9月2日から10月25日までの8週間、第2学期は11月4日から12月20日の7週間、第3学期は1月14日から3月7日までの8週間、第4学期は3月24日から6月6日までの11週間であった。前期（第1学期と第2学期）は主に《日本語》を意識し学ぶことに比重がおかれ、後期（第3学期と第4学期）は各学生の専門や関心領域に近い《内容》を日本語で取り扱うことに比重がおかれる。

毎日の授業は午前と午後に分かれる。前期の午前は文法など言語の形式面・機能面を重視し、午後は内容重視の授業で聴解、読解、発話等の総合的な言語の運用力を高める。後期は午前にも内容重視の科目が追加される。授業時間は、50分を1コマとして、午前2コマ、午後2コマである¹。

今年度IUCで開講された授業は以下の通りである。第1学期の午前は「文法・待遇表現²」、午後は「総合運用Ⅰ」。第2学期の午前は「接続表現」「統合日本語Ⅰ」、午後は「総合運用Ⅱ」。第3学期は午前の「統合日本語Ⅱ」が全学生の共通科目であるが、同じく午前の「選択A」「選択B」、そして午後の「総合運用Ⅲ」は学生の関心に沿った選択科目である。第1学期から第3学期までの金曜午後は「総合運用」の授業は行わず、原則、学生の自習時間とした（「寺子屋」と呼称）。第4学期の午前は「統合日本語Ⅲ」「選択A」「選択B」。午後は「プロジェクトワーク」と「グループ学習」のいずれか1つを選択。第3・第4学期には、随意に履修できるオプション科目、「選択C」「就活指導」も用意された。

2024-2025年度 40週間のレギュラーコース日程

週	10:00-11:50 午前	13:20-15:00 午後（原則水曜なし）	
1	オリエンテーション・試験・面談	面談・避難訓練など	第1学期 9/2-10/25 8週間
2	文法・待遇表現	総合運用 I 寺子屋（金曜）	
3			
4			
5			
6			
7			
8			
9	秋休み1週間 10月26日(土)～11月3日(日)		
10	接続表現 統合日本語 I	総合運用 II 寺子屋（金曜）	第2学期 11/4-12/20 7週間
11			
12			
13			
14			
15			
16			
17-19	冬休み3週間 12月21日(土)～1月13日(月)		
20	統合 日本語 II	総合運用 III 選択C（水曜） 寺子屋/就活指導（金曜） 個人面談	第3学期 1/14-3/7 8週間
21			
22			
23			
24			
25			
26			
27			
28-29	春休み2週間 3月8日(土)～3月23日(日)		
30	統合 日本語 III	プロジェクトワーク/ グループ学習 選択C（水）就活指導（金）	第4学期 3/24-6/6 11週間 授業は実質 8週間
31			
32			
33			
34			
35	GW休み1週間 4月26日(土)～5月5日(月)		
36	統合 日本語 III	GWの前と同様 試験5/26月、発表準備 発表6/2-3 面談6/4-6 修了6/6	↓
37			
38			
39			
40			

3 ICTの活用状況

3-1 教育・業務で用いたICT技術・サービス

授業用資料や事務的な各種情報の掲示と宿題の提出・採点のためにはGoogle Workspace for Education Fundamentals³を、試験のためにはQuilgo⁴を、そして教職員同士の日々のやりとりにはSlack⁵を利用した。

教材の配布にあたっては、デジタルファイルと紙（プリントならびに書籍）を併用した。年度末に実施した学生アンケートでは紙の教材と電子教材のどちらが使いやすいかを尋ねたが、電子教材と回答した者が24%、紙が34%、どちらでもいいとした者が42%と、電子教材よりも紙を好む者のほうが多い結果となった。IUCで教材の電子化をどのような形でどの程度まで推し進めていくかは引き続き検討すべき課題であるが、検討のためには学生の好みあるいは抵抗感を今後も注視していく必要があるだろう。

自習用オンライン教材としてはWebKIC⁶ならびにRepeaTalk（リピートーク）⁷を用いた。前者は漢字学習プログラムのために、後者は「文法・待遇表現」「統合日本語」「選択B 話す」の各コースと漢字学習プログラムのための聞き取りや音読の練習、あるいは表現練習に活用した。

教職員会議、教員対学生の個人面談、会話パートナーセッション⁸などではZoom⁹を活用した。授業でも、内容の録画を目的として使われる場合があった。また、悪天候などの理由でIUCキャンパスへの通勤・通学が困難な場合、あるいは教員が健康上の理由などで対面授業を行えない場合に緊急的な措置としてZoomでのオンライン授業あるいはハイブリッド授業を行う選択肢を用意した。

3-2 生成AI等活用についての指針

今年度は生成AI等の利用について以下の指針を学生に示した。

生成AI等のICTを学生自身の日本語運用能力を高める補助として使うこと、そしてより有効な使い方を試行錯誤することを日本研究センターは歓迎します。

宿題の作文やスピーチ原稿は、最初は必ず自分で書いて下さい。読む宿題はまず自分の力で読んで下さい。もちろん、単語リストが用意されている場合は使ってかまいません。その後で、授業で先生から生成AI等の使い方について指示がある場合は、それに従って下さい。授業によっては使用が禁止される場合もあります。先生からの指示や禁止がない場合、必要であれば例えば以下のような方法で生成AIを活用することができるでしょう。

- 作文は、自分の力で書いたものをAIにチェックさせる。（その結果は、自分で書いた作文の下に貼り付けて先生に提出して下さい。）
- 読む宿題は、自分で読んだ後でどうしても分からなかった部分についてAIに尋ねてみる。AIに単語リストを作らせてみる。

他にもICTの有効な使い方を見つけたら、それを私たちにぜひ教えて下さい。

4 第1学期の教育内容

月～金曜の午前の授業は「文法・待遇表現」を7週間実施した。午後（6週間）は月・火・木曜に「総合運用Ⅰ」の授業を、金曜に「寺子屋」を実施した。「文法・待遇表現」は全学生を9クラスに、「総合運用Ⅰ」は8クラスに分け、1クラスあたり学生6～8名程度の少人数で授業を行った¹⁰。

4-1 午前の授業内容

4-1-1 文法・待遇表現

第1学期午前の授業はいわゆる初級文法の復習を目的とし、特に中級学習者にとって理解が難しく誤りやすい事項を取り上げ、知識を整理し正確さを高めながら運用力の向上をはかった。そして、日本語話者と円滑な人間関係を構築できるよう待遇表現を指導した。文法については、IUC作成 *Japanese Grammar*、IUC作成 *An Introduction to Advanced Spoken Japanese*、『レベルアップ日本語文法 中級』¹¹のいずれかを、各クラスの日本語習熟度に応じて使用した。待遇表現については主教材としてIUC作成『[20の場面で学ぶ敬語コミュニケーション——気持ちが伝わる中級からの日本語待遇表現](#)』（ジャパントイムズ出版）を用いた。

指導には、31日間62コマをあてた。文法と待遇表現の各ユニットをどのようなスケジュールで扱ったかはクラスによって異なるが¹²、概して文法には21日間42コマ程度、待遇表現には10日間20コマ程度の時間を割いた。

4-2 午後の内容

4-2-1 総合運用Ⅰ

月・火・木曜の「総合運用Ⅰ」は主として読解、聴解、発話などの技能面に焦点をあて、総合的な日本語運用力の向上を目指した。第1学期は身近で日常的な話題を扱った「経験談」という単元から開始し、自然な話し方に慣れるとともに、既習の文法事項などを活用

する機会を提供した。単元の最後には、教員やIUC卒業生が教職員をインタビューしたビデオを参考に学生自身が教職員に対してインタビュー活動を行い、その内容について授業で発表を行った。続いて新聞やニュースを教材とする社会性をおびた単元に進み、日本の時事を報告・論述するための単語・表現を学び運用する機会を提供した。15日間30コマをあてた。

4-2-2 寺子屋

金曜は「総合運用Ⅰ」の授業を行わず、「寺子屋」と称して学生が自由に自分の望む勉強ができる時間を設け、自律的な学習を促した。学生はこの時間、日本語能力の向上に資することであれば何をしてよく、活動の場所も自由とされた。有志で会話をしながらボードゲームを楽しむゲームクラブや、教員とともにテレビドラマを視聴して聴き取り能力を鍛えるドラマクラブなどが発足した。

「寺子屋」は、常勤講師による個別指導やフィードバック、後述する「KIC統一試験」(9-2を参照)や外部講師を招いた講演会、あるいは漢字の形やバランスに気をつけながら書き方を指導する「漢字練習会」など、通常授業の枠に収まらない様々な活動を実施する時間としても機能した。

「寺子屋」には5日間、計10コマ分の時間をあてた。

5 第2学期の教育内容

月～金曜の午前の授業は「接続表現」を3週間、その後「統合日本語Ⅰ」を4週間実施した。午後は月・火・木曜に「総合運用Ⅱ」の授業を7週間行った。第1学期に続いて、第2学期も金曜午後は「寺子屋」の時間とした。第1学期と同様、午前は9クラス編成、午後は8クラス編成で授業を実施した。

5-1 午前の授業内容

5-1-1 接続表現

接続詞に注目し、文と文の接続、段落や文章の組み立て方(複段落の作成)を指導した。教材としてIUC作成『接続表現』を用いた。クラスによってやや異なるが、15日間30コマ程度をこの指導にあてた。

5-1-2 統合日本語Ⅰ

一般的な中級段階の日本語から、より高度で専門的な日本語への橋渡しをするために、IUC作成『統合日本語 Integrated Japanese Advanced Course』を用いた。各課は同一の話し

題で構成される「文章編」と「会話編」からなる。「文章編」では読解練習とそこで扱われる文型・語彙・表現を学び、「会話編」では自然な話し言葉を状況に応じて使い分けられるよう指導した。第2学期は上巻第1課・第2課、及び第3課（文章編）までを扱い、指導には19日間38コマ程度をあてた。このうち12月18日はミニ発表会と称して全学生が7～8分の発表と質疑応答を行い、学んだ知識や技能を運用する機会とした。

5-2 午後の内容

5-2-1 総合運用Ⅱ

月・火・木曜の「総合運用Ⅱ」では、現代社会の問題をめぐる生の教材、例えば新聞・雑誌記事や報道番組などを読解・聴解し、話し合いを重ねることによって、一般的な話題についても日本語母語話者と話し合える能力の獲得を目指し、意見文なども書かせた。教材は、話題シラバスのモジュール型教材群「外国人と国籍」「文化の発信」「教育」「現代の若者たち」「ワーク・ライフ・バランス」「地球環境」「差別と人権」「情報化社会」である。学生の興味や関心あるいは必要性に応じて各クラスが教材を選択し、授業進度も各クラスの理解度に合わせて調整した。ただし、「外国人と国籍」に関しては全クラス必修とした。19日間38コマを指導にあてた。

5-2-2 寺子屋

第1学期に準じる（4-2-2を参照）。第2学期は6日間12コマ分の時間をあてた。

6 第3学期の教育内容

冬休みが明けた1月から第3学期が始まり、各学生の専門・興味・関心・必要性に応じた選択授業がコースに加わる。

午前は月・水曜に「選択A」、火曜に「選択B」、木・金曜に「統合日本語Ⅱ」を実施した。午後は月・火・木曜に「総合運用Ⅲ」、水曜に随意科目の「選択C」、金曜に「寺子屋」ならびに随意科目の「就活指導」を実施した。

全学生が受講する「統合日本語Ⅱ」は9クラス編成で授業を行った。選択授業は、受講希望者が多い場合に1つのコースを複数のクラスに分割する場合があった。結果、選択授業の1クラスあたりの学生数は最少で4名、最大で10名となった。

6-1 午前の授業内容

6-1-1 統合日本語Ⅱ

第3学期に全学生が共通の教材で学ぶ授業はこの「統合日本語Ⅱ」のみである。IUC作成『統合日本語 Integrated Japanese Advanced Course』の、第3課会話編（上巻）、第4・第5課（下巻）を扱った。木・金曜の週2日、計16日間32コマ実施した。最終週の2日間はミニ発表会を行った。

6-1-2 選択A

自分の専門領域に関連するコースを1つ選び、将来の学術研究や専門実務に資する言語面の能力育成に取り組む科目である。学生には第3・第4学期を通じて同じコースを継続履修するよう奨励した。コース選択に迷う学生のため、第2学期中に各コースの説明と質問受付の機会を設けた。本年度は従来からの「文化人類学」「政治学」「文学」「歴史学」「法律」「日本学」に加えて「メディア表現」コースを新設した。月・水曜、計14日間28コマ実施した。

・文化人類学

受講生の専門、関心を考慮し、第3学期は「フィールドワーク」「植民地とネイティヴ」「伝統文化と記憶」「グローバル化」「死と看取り」「テクノロジーと人類」というテーマを設定し、具体的な事象から抽象的課題に至る専門性の高い読み物を教材とした。第4学期は各学生が自己のテーマにそった素材を提供し話し合いを進めた。校外学習として、「田谷の洞窟」（定泉寺）と大船駅周辺を散策した。

・政治学

大学生向けの教科書を読み、第3学期は日本政治、第4学期は国際政治や日本外交に関する理解を深めた。授業では読み物の内容確認や、学生から出された話題を中心に議論を行った。また、学生が自分で選んだニュースを発表し、議論を進める時間を設けた。第4学期には国会議事堂を見学した。

・文学

明治から現代までの短編小説および関連する評論を取り上げ、様々な観点から作品を分析し、話し合いを行った。おおむね2～3回の授業で1作品を読んだ。

・歴史学

日本語で歴史研究を進めていくための基礎訓練を積み重ね、語彙・表現の拡充を図った。

第3学期から第4学期前半は学生の興味・関心・必要性に応じて、専門書・論文および歴史的史料を素材とする読解練習を行った。第4学期後半は、各学生が自分の研究テーマに関する資料を選び、2時間の授業を構成する取り組みを行った。また、横浜市中心図書館、国立国会図書館を訪れ、図書館の使い方と資料の探し方を体験した。

・法律

憲法を中心に、民法、国際法、刑法、知財法の一部を取り上げ、条文・判例を自力で理解できる技能を育成することで、法律に関わる話題について自ら調べ、それを説明し、自説を展開できるよう指導した。また、裁判傍聴、東京地検見学、日本大学法学部大学院授業体験なども行った。

・メディア表現

1950年代から2020年代までの劇映画、ドキュメンタリー映画を中心に扱い、一部写真、舞台芸術、アニメーションも扱った。おおむね1作品を2回の授業で扱い、併せて作品にまつわる評論・論文・対談などを読んだ。作中で用いられる言葉や作品について語る言葉を深く理解すること、作品について自分の言葉で述べ、意見を交わすことができるようになることを目指した。

・日本学

専門が定まっていない学生、幅広い分野で活かせる日本語力を伸ばしたい学生などを対象に設けられた選択科目である。「選択A」の専門分野を中心に日本研究や日本についての多種多様な教材を用い、知識を蓄え、理解を深めたのち、互いに話し合うことで日本語力の定着を図った。

6-1-3 選択B

選択Bでは、必要とされるあるいは弱点と思われる日本語力の増強のために、「話す」「聴く」「読む」「仕事の日本語：就活編」の4コースを開講した。火曜の計7日間14コマをあてた。

・話す

第3学期と第4学期に開講された。2学期間連続して受講する学生と、どちらかの学期のみ受講する学生がいた。IUC作成『洗練された会話のための表現集』を共通教材とし、討論におけるフォーマルな表現の習得に努めた。討論、ディベート、発表と質疑応答、音読、即時的なスピーチ、フォーマル・カジュアルなどのスピーチレベルを変えて行う会話練習などの活動、発音・イントネーションの指導などを行った。

・聴く

日本語のリズムや音の特徴について学び、聞き分ける練習を行った。さらに作家や研究者のインタビュー動画を視聴し、話し言葉の特徴を確認することで聞き取り能力の向上を目指した。

・読む

中学受験、高校受験、大学受験の問題を中心に、日本の学校教育ではどのような読解力が求められているかを体感し、文章の背景の理解と読解力を上げることを目指した。授業はピア・ラーニングを中心に行った。

・仕事の日本語：就活編

就職活動を考えている学生を対象とし、面接の練習、メールの課題提出などを通して、日本語力をのばしていくことを目的とした。また、元神奈川経済同友会の湧井敏雄氏が面接官となり、模擬就職面接を行った。（6-2-2「選択Cビジネス」参照）

6-2 午後の内容

月・火・木曜に開講される「総合運用Ⅲ」は、「現代史」「大衆文化」「ビジネス社会」の3コースの中から1つを選ぶ選択授業である。いずれのコースも記事の読解、ビデオの視聴、そしてその内容についての討論などの活動が盛り込まれている。計18日間36コマ実施した。水曜は「選択C」を、金曜は「寺子屋」および「就活指導」を実施した。

6-2-1 総合運用Ⅲ

・現代史

ムービーフィルムが残されている1900年前後からの日本の近現代史を、「戦前の日本1900-45」「敗戦と復興1945-55」「高度成長1955-70」「現代の日本1970-95」の4期に分け、ビデオと読み物で概観した。また、中学・高校の歴史教科書の記述を比較するグループ・プロジェクトを実施した。

・大衆文化

広い意味での日本の「大衆文化」に関して、専門家によって書かれた論文を読み、議論ができるようになることを目標とした。「マンガ・ジェンダー」「映画・アニメ」「音楽・ことば」「物語・ゲーム」という各テーマで資料を読み、映像を見て話し合ったうえで、学生が発表する時間を設けた。コースの最後には、学びを統合する目的で、学生各自が「文化」と思う事象をとりあげ発表した。

・ビジネス社会

本コースにおいては、「ソーシャルビジネス」「起業」「企業の海外進出」等のテーマを取り上げた。新聞記事やビジネス関連のテレビ番組を教材として活用し、実際のビジネスシーンにおいてよく使われる語彙および表現を習得することを目的とした。「マザーハウス」「ドン・キホーテ」「伊藤園」などの企業を取り上げ、それぞれの経営戦略や海外展開の事例を通じて、より実践的な知識を深めた。また、コトバンク株式会社代表取締役、小泉純氏から起業の経験や事業展開などの話を直接きく機会を設けた。

6-2-2 選択C

第3・第4学期には随意科目として「文語文法」「漢文」「ビジネス」の3コースを開設し、水曜に実施した。「ビジネス」は外部から招いた専門家が指導にあたった。

・文語文法

文語文法の用語や歴史的仮名遣いから導入し、動詞・形容詞・助動詞の指導に進み、文語作品の部分的読解も並行して行った。

・漢文

漢文資料を読む基礎訓練として漢文や漢文体の素材を取り上げ、読み下しと解釈の練習を行った。まず漢文の基礎構文をおさえ、それを応用して短い文章を読んだ。

・ビジネス

「日本の産業と金融」を主題に、新聞や雑誌の記事を素材として、ビジネス界の実情にも触れながら、日本経済の現在に至る経緯を紹介し、今後の展望と課題について講義した。元神奈川経済同友会の湧井敏雄氏が指導にあたった。

6-2-3 寺子屋

4-2-2ですでに述べた活動に加え、学生有志と一緒に映画を鑑賞する「映画研究会」が発足した。また、次節で述べる「就活指導」もこの時間に実施した。

6-2-4 就活指導

学生の就職活動を支援するため、2月から随意選択科目としてキャリアコンサルタント田中孝一郎氏による「就活指導」クラスを金曜午後に開講し、レギュラーコース終了後の6月27日まで継続した。第3学期中は講義、第4学期からは各学生に個別指導を行い、履歴書・エントリーシート・職務経歴書の書き方の解説や内容の添削・アドバイスをを行った。

7 第4学期の教育内容

プログラム最終第4学期の午前は、第3学期午前と同様の形態をとる。「選択A」は同じコースを第3学期から継続履修するが、「選択B」は「話す」「書く」「仕事の日本語：職場編」「現代小説」「日本文化論」の5コースから1つを選択できる。「選択A」は月・水曜、「選択B」は火曜に実施した。そして木・金曜には「統合日本語Ⅲ」を開講した。

午後は「プロジェクトワーク」「グループ学習」のいずれか1つの形態を選択することができる。「プロジェクトワーク」は学生と担当教員の相談の上で任意の時間に週1コマ実施した。「グループ学習」には、グループに所属する学生数によって週1コマあるいは週2コマをあてた。随意科目である「選択C」は第3学期と同じコースが用意され、水曜午後に開講した。金曜午後には「就活指導」が実施された。

7-1 午前の授業内容

7-1-1 統合日本語Ⅲ

木・金曜に実施した「統合日本語Ⅲ」では、『統合日本語 Integrated Japanese Advanced Course』テキストの未終了部分をカバーした後¹³、日本語の主に形式面の補強・拡充・総仕上げを目指した。学生の到達度、興味、要望に応じて各クラスでそれぞれに教材を選択し、内容に関連した発話活動などを通じて既習事項を総ざらいし、日本語の知識をより確実なものにするとともに、日本語上級者が知っておくべき事項の欠落を補うなどした。16日間32コマをあてた。

7-1-2 選択A

第3学期と同じコースを継続履修する。15日間30コマをあてた。各コースの内容については6-1-2を参照されたい。

7-1-3 選択B

第4学期の火曜は、「話す」「書く」「仕事の日本語：就活編」「日本文化論」「現代小説」の計5コースを開講した。第3学期同様日本語力の増強を図ることも可能であるし、また、まとまった内容のものを読むという目的で「日本文化論」「現代小説」を選択することもできる。8日間16コマをあてた。（「話す」コースについては6-1-3参照）

・書く

随筆から小論文まで、幅広い分野の文章表現力の習得を目的とした。学生は毎週400-600字程度の文章を書き、授業ではそれを学生間で検討・批評した。また、文章表現技術修得

のための教材を用いて、毎週異なる視点から日本語のよりよい文章について学んだ。

・仕事の日本語：職場編

ビジネス場面での待遇表現の位置づけで、さまざまな状況における会話練習を行った。また、ビジネス上のコミュニケーション問題の事例を読み、問題の所在、解決方法について考え、ディスカッションを行った。

・日本文化論

青木保著『日本文化論の変容』を中心教材とした上で、本文で言及されている様々な日本人論の著作を講読し話し合いをした。

・現代小説

現代作家による短編あるいは中編小説を読み、論じた。授業では予習を踏まえて学生間の議論を促し、作品の「読み」を相互に深めあった。教材として、村上春樹、向田邦子、江戸川乱歩、宮部みゆき、本谷有希子、川上弘美、小川洋子の作品を扱った。1作品につき短編は1回、中編は2回の授業を費やした。

7-2 午後の授業内容

第4学期の午後は「プロジェクトワーク」あるいは「グループ学習」が行われた。また第3学期と同様、随意科目である「選択C」を開講した（詳細は6-2-2を参照）。金曜午後には先学期から引き続いて「就活指導」が開講され、レギュラーコース終了後の6月27日まで継続した。（「就活指導」の詳細は6-2-4を参照）

・プロジェクトワーク

各学生が個人またはグループで自己の専門や興味ある分野の主題を選び、教員から個別の指導・助言を受けながら、調査研究や文献の読解などを行う。今年度は29名の学生が選択した。テーマに関しては卒業発表会の内容と重なる部分が多いので、そちらを参照されたい（8 卒業発表会）。学生1人につき週1日、計8コマを指導にあてた。

・グループ学習

特定の日本語課題に対して関心を同じくする者が、数名でグループを構成し学習する。今年度は、日本語能力試験の受験準備をするグループ、話しながら使用語彙の拡充を目指すグループ、クリエイティブ・ライティングの実践を行うグループなど7つが成立した。学生2名のグループは週1コマ（計8コマ）、それよりも学生数が多いグループは週2コマ（計16コマ）を指導にあてた。

8 卒業発表会

卒業発表会は10ヵ月間にわたる学習の集大成となる催しであり、年度の最終週に举行される。学生は質疑応答を含め1人15分の持ち時間内で、改まった形式の発表をする。会場を2ヶ所に分け、2日間にわたって開催した¹⁴。

第4学期の午後に「プロジェクトワーク」を選択した学生は、その時間内に卒業発表の準備を進めた。「グループ学習」の学生は第2・第3学期に行われたミニ発表会などの機会に話した内容を洗練させるなどして卒業発表に仕上げた。「グループ学習」選択生の発表準備にあたっては一人ひとりに割り当てられた担当教員が原稿のチェックを行い、発表の予行演習を指導した（学生1人あたり2コマ分の時間をあてた）。

<https://iuc-japan.fsi.stanford.edu/news> の「アーカイブ」に掲載されている夏のニュースレターにおいて、発表題目と要旨を公開しているので参照されたい¹⁵。

9 通年で実施した学習指導と行事など

9-1 評価

9-1-1 テスト

本コースでの学習成果を測定するため、入学直後と卒業時に実力試験を実施した。文法、読解、聴解、漢字の試験、そして面接形式での発話試験を入学時と卒業時に実施し、入学時にのみ作文の試験を加えた。文法・読解・聴解の筆記試験はGoogle FormsとQuilgoを用いて非同期的に実施したが、漢字の試験は手書きで答えさせる問題とGoogleフォームによる選択式の問題を用意し、対面で実施した。入学時の作文テストは、辞書等の使用は認めず、1時間以内にその場で文章を考え、紙に手書きで書いて提出させた。

第2学期末には日本語テストシステムJ-CAT₁₆を使用して「中間実力試験」を実施した。IUCでの学習内容とは直接関係のない試験を行うことで、プログラムを半分終えた時点での学生の実力を客観的に判断する目安とした。

9-1-2 個人面談

IUCでは入学時の実力試験結果をもとに第1学期のクラスを編成するが、コース開始に先立ち、午前（文法の授業）のクラス担任教師が自分の受け持つ学生と個別に面談し、試験の結果を踏まえて40週にわたる学習の指針などを助言した。第1学期末にも担任と学生とが個別に面談し、その間の学習ぶりを振り返り、新たな課題を設定するなどした。

文法のクラス担任と学生の個人面談の機会はその後も各学期末に設け、最終学期にあたる第4学期の期末には入学以後10ヵ月間の学習を全体的に振り返った。

9-2 漢字学習プログラムSKIP

プログラム期間を通じて、常用漢字習得のための自律学習プログラム「SKIP (Special Kanji Intensive Program)」を実施している。学生は常用漢字すべてを卒業までに習得できるよう毎日教材を独習し、授業以外の時間にクイズ全156回を受けることとなっている。教材にはIUC編集発行の市販教材で、漢字を単独ではなく熟語や例文と共に学習できるよう構成された[*Kanji in Context*ならびにそのワークブック *Kanji in Context Work Book vol. 1・2* \(ジャパントタイムズ社\)](#)と、それらをWebアプリケーション化した「[WebKIC](#)」を用いた。

そして、学習を促すために「KIC統一試験」を作成し、実施した。統一試験では、漢字の書き方、読み方等の問題100問を全学生が受け、点数が午前中の文法クラスで決められた合格点を下回った場合は再試験を受けなければならない。各学期に1～2回、計7回実施した。第1学期から第3学期までは金曜日の寺子屋の時間に、そして第4学期は「統合日本語Ⅲ」の時間内に行った。

クイズを受ける際、学生は白紙あるいは印刷した問題用紙に答えを記入し、それをスキャンするかあるいはスマートフォン等で撮影するかしてPDFに変換し、提出した。iPad + Appleペンシルなどの手書き入力デバイスを使い、問題用紙のPDFファイルに直接答案を書き込んで提出する学生もいた。統一試験を受ける際は、学生は与えられた紙の解答用紙に手書きで答えを書き込み、それを撮影してPDFに変換し、提出した。PDFでの提出は、リモート勤務での採点作業を可能にするためである。

第1学期2週目に50分間、各文法クラスで担任が漢字についてのオリエンテーションを行った。また、第1学期に「ミニ漢字講座」を1回開講し、希望する学生に漢字の書き方の指導や部首の解説を行った。第1～第3学期は寺子屋の時間を中心に、漢字を書いたり漢字を使って例文を作成したりする「漢字練習会」を定期的に開催し、教員がその指導にあたった(4-2-2「寺子屋」参照)。

9-3 講演会など、各種の企画や催し

9-3-1 全学生あるいは希望者が対象のもの

全学生を対象とする講演会を1回(4月11日)、希望者を対象とする講演会・交流会・ワークショップを8回(10月12日、10月23日、11月13日、12月11日、1月10日、2月7日、2月21日、5月12日)開催した。5月12日から24日にかけては、日本大学法学部大学院(法学研究科、新聞学研究科)で開講されている授業を体験受講できる機会も設けられた。また、株式会社東急ホテルズ&リゾーツのご厚意により有志学生を各地の日本遺産に泊まりがけでご招待いただき、学生がそこで見聞したこと、考察したことをIUC卒業発表会ならびに「東急ホテルズ&リゾーツ日本遺産研究発表会」¹⁷で発表するという「日本遺産プロジェ

クト」も催行された¹⁸。

このほか、希望学生を対象とした課外活動「書道クラブ」「古筆クラブ」「茶道クラブ」を設けた。「書道クラブ」は書家小林紘子氏の指導のもとで書道の稽古を行い、その成果として卒業発表会会場に作品を展示した。「古筆クラブ」は同じく小林氏が指導を担当し、手書きの歴史的資料を理解するのに欠かせない「くずし字」の読解練習を段階的に進めた。「茶道クラブ」は裏千家茶名結城宗織氏のもとで茶道の基本を学んだ。

9-3-2 日本財団フェロープログラム関連行事

日本財団のご厚意により実施している日本財団フェロープログラム¹⁹では、レギュラーコースの授業と活動に加えていくつかの催しを行っている。今年度はIUC卒業生による講演会（4月26日）を設け、フェローによる特別発表会を前期（1月22日・1月29日）と後期（5月13日・20日）の2度に分けて開催した。

10 おわりに

修了生全54名のうち50名が回答した年度末アンケートの結果は、昨年度にも増して高評価であった²⁰。これを見ると、今年度のIUCレギュラーコースは概ね成功裏に終了したと言えるだろう。もちろん、各授業科目やその他の具体的な項目について個々に改善の余地は指摘されている。しかし、修了生からの総合的な高評価には、IUCが従来からの集中的な日本語教育カリキュラムの枠組みを維持しつつ教材・授業内容・試験の改良やICTの導入を漸次行い、さらに新科目も設置するなどの試みによって学生のニーズ・関心への対応を進めていることが寄与しているのではないだろうか。

一方で、そうした変更は新たな問題も浮き彫りにしている。例えば今年度は入学時と卒業時の実力試験に漢字の書き取り問題を追加したが、卒業時の試験結果を見ると、基礎的な漢字を書く問題の成績が入学時と比べて向上していなかった²¹。その理由は単純ではないだろう。ただ、いわゆるコロナ禍を契機にICTの導入が一気に進み、作文や読解ワークシートなどといった課題の大半がGoogleドキュメントやMS Wordによって作成されるようになったことで、学生が文字を手書きする機会は大きく減った。このことは、卒業時漢字試験の結果に対して望ましくぬ影響を与えたのではないだろうか。日常あるいは研究・職業生活の中で日本語を使う際に手で字を書く場面は減りつつあるとはいえ、大学院への出願や役所への届け出などといった重要な節目においてペンと紙は依然使わねばならず、書字能力のニーズは決して失われていない。IUCでの予習や宿題の遂行あるいは添削にあたってICTによる利便性は享受しつつも、学生が書字を行う機会はなるべく確保していくべきだろう。

こうした問題をカリキュラム改善の好機と捉え、IUCは今後も学生のニーズに即した教

育を模索していく所存である。

(あきざわ ともたろう／IUCレギュラーコース言語課程主任)

注

- 1 ただし、第4学期午後に行われるプロジェクトワーク等の個人指導は週に1コマである。
- 2 IUCでは、敬語だけでなくその随伴行動、社会慣習、礼儀、挨拶などを含めた言語行動を総称して待遇表現と呼んでいる。
- 3 https://edu.google.com/intl/ALL_jp/workspace-for-education/editions/education-fundamentals/
- 4 <https://quilgo.com/>
- 5 <https://slack.com/>
- 6 https://iucjapan.org/html/call_j.html
- 7 <https://www.repeataalk-info.net/>
- 8 「会話パートナー」とは、授業時間外にIUC教材助手と自由な会話ができる機会である。会話能力が弱めの学生のために提供している。
- 9 <https://zoom.us/>
- 10 学生のクラス分けは、9-1-1で述べる入学時実力試験の結果に基づいて決定した。
- 11 許明子・宮崎恵子 (2013)『レベルアップ日本語文法中級』くろしお出版
- 12 水曜は待遇表現、それ以外の曜日は文法、というように曜日によって扱う対象を決めたクラスもあれば、文法テキストの進み具合に合わせて適宜待遇表現を扱う日を挟んでいったクラスもある。
- 13 1つのクラスは『統合日本語 Integrated Japanese Advanced Course』を第3学期までに終了した。
- 14 会場として、横浜国際協力センター6階の会議室と同階のGALERIOを横浜市よりお借りした。
- 15 2023-24年度以前のものについては https://iucjapan.org/html/presentations_j.htmlを参照のこと。
- 16 聴解、文字・語彙、文法、読解の4セクションからなる、オンラインアダプティブテストシステム。CEFRレベル・JLPTレベルと、総合得点との対応関係が示されている。一般社団法人日本語教育支援協会により運営。 <https://j-cat.jalesa.org>
- 17 IUCレギュラーコース終了後の6月10日（火）、セルリアンタワー東急ホテルの能楽堂にて開催された。
- 18 本節には記さなかったが、他にも多くのイベントが催された。それらについては稿末

の資料「2024-25年度 授業以外の各種イベント」を参照されたい。

- 19 <https://iuc-japan.fsi.stanford.edu/fellowships> の、「日本財団フェローシップ」の項目を参照のこと。
- 20 アンケートの最初の設問「Overall design of the program was」（4件法）への回答は、Excellentが60%（30人）、Goodが36%（18人）、Fairが4%（2人）であった。Poorはなし。
- 21 単純に全学生の平均得点を比較した結果である。もちろん、個々に見れば成績が向上した学生もいる。一方で成績が下がった学生も無視できない数存在する。

参考文献

大竹弘子（2025）「2025年度漢文夏期集中コース報告」『アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター教育研究年報』第14号 pp.93-96

<https://www.iucjapan.org/pdf/nenpou2025_Otake.pdf>

大橋真貴子、高橋佳奈子、後藤恵利、白石恵利奈、松田さおり、川西由美子、杉松香苗、結城佐織（2025）「2025年度夏期コース報告」『アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター教育研究年報』第14号 pp.69-92

<https://www.iucjapan.org/pdf/nenpou2025_Ohashi_et_al.pdf>

【資料】2024-25年度 授業以外の各種イベント

2024年

- | | |
|-----------|---------------------------------------|
| 9月28日（土） | 明治大学講師 伊勢弘志氏による「江戸歴史ツアー」 |
| 10月12日（土） | 東京都立大学等々力高等学校にて
ロータリークラブ主催「国際交流授業」 |
| 10月23日（水） | 外務省訪問 |
| 11月3日（日） | 横浜市立大学 浜大祭 |
| 11月13日（水） | 国文学研究資料館ワークショップ |
| 12月11日（水） | 米国外交官との懇談会 |
| 12月16日（月） | 鶴岡八幡宮 御神楽拝観 |

2025年

- | | |
|----------|----------------------|
| 1月10日（金） | 国立歴史民俗博物館見学 |
| 1月21日（火） | 日本財団奨学金受給生前期特別発表会（1） |
| 1月28日（火） | 日本財団奨学金受給生前期特別発表会（2） |
| 2月7日（金） | 「カケハシ・プロジェクト」 |

2月21日 (金)	国文学研究資料館ワークショップ
2月28日 (金)	日本財団フェローシッププログラムワークショップ ステファニー・サンチ氏 (2019-20卒業生)
春休み期間中	「東急ホテルズ&リゾーツ日本遺産プロジェクト」
4月11日 (金)	第21回IUCレクチャーシリーズ ティモシー・ジョージ氏
5月12日 (金)	能ワークショップ 寺井千景氏
5月16日 (金)	下田黒船祭ツアー
～18日 (日)	
5月12日 (月)	日本大学法学部大学院 (法学研究科、新聞学研究科) 体験授業
～24日 (金)	
5月13日 (火)	日本財団奨学金受給生後期特別発表会 (1)
5月20日 (火)	日本財団奨学金受給生後期特別発表会 (2)
6月10日 (火)	東急ホテルズ&リゾーツ日本遺産研究発表会